第六篇、普墺戰役當時に於けるビスマルクの外交にて墺を中心とするビスマルクの外交政策を論じて居る。觀念的に成り勝ちであつた輓近の我が西洋史學界に在り正統な政治史の本格的研究に終始された博士の堅實にして重厚な史風は、おのづから本書の行間に滲み出て居り、篇を章に章を節に分つた緻密な內容目次を一見しても、巨石を以て疊み上げた建築物を思ばしめるものがある。ビスマルク一代の外交政策を指導せる三大方針は實際的政略の勵行と小獨逸主義の達成の兩者にありとする結論は、一見平凡自明の如く思はれるが、此の結論に達する爲、七百頁に垂んとする浩瀚な本書を埋め盡くして根本史料に卽しつゝあらゆる面からの檢討推究を加へて剩す所のない博士の研究方法は、史學研究の本道を明示して後進へのこよなき指針となるであらうと共に、他面において本書が、國際外交に對する理解の極めて乏しい我國朝野の蒙を啓くに役立つ事多大なるを信じ、一般人士の熟讀を希求して已まない次第である。（大八洲出版株式會社發行　定價貳拾參圓）

（兼岩正夫）

啓蒙史學の研究　第一部　概論篇　千代田　謙著

さきに『西洋近世史學史序說』を公刊された廣島文理科大學の千代田博士は、その後戰時中を通じ依然默々として眞摯な學術的研究を續けられ、今日その續篇たる啓蒙期の史學に關する大著を發表された。戰時中世を風靡した曲學阿世の大勢にも拘らず、敢然として自己の學的探究を遂行された博士の態度こそ、まさにその學者的良心の純潔性を示すものであり、その成果が一千頁に近い大著として公刊され本邦西洋史學史研究上、一大記念碑の樹立をみるに至つたことは、誠に當然と云はねばならない。

千代田博士は本書の第一篇（緒論）において先づ啓蒙史學の研究に對する根本的な立場を明にされる。卽ち從來の十九世紀的立場に關して批判反省を加へ、又、史學史を精神史的立場より考察すべきことを强調される。次いで啓蒙精神と啓蒙史學との關聯を英、佛、獨各國の特殊性を中心に考慮しつゝ論ぜられ、「かくの如く、時代的國民的特色を呈するものとして啓蒙史學思想は了解せられると共に、各史的思想に樣式化せられたる個人的、また各各の時・處的なる特色が錯綜して、無限多樣のニュアンスを浮かべる。啓蒙史學の共通的・類似的性格と、個別的・相異的風采とを頗を懷れず、いささか追體驗的に味得せん」と試みられるのが本書の主目標なのである。

以下博士は第二篇（佛蘭西啓蒙史學）においてはヴォルテールを中心に、モンテスキュウ、百科全書家、テュルゴー、ルソー、レイナール、ヴォルネイ、コンドルセー等について、佛蘭西における啓蒙史學の主潮をあとづけられ、第三篇（英國啓蒙史學）ではヒュームを中心に、ボーリングブローク、ロバートソン、ファーガソン、ギボン等について詳述され、第四篇（獨逸啓蒙史學）にあつては、フリードリヒ二世の史學を遠望しつゝ、イゼーリン、ウェーゲリン、ウィンケルマン、メーゼル、ヘルデル等に論及される。

かく佛英獨の各啓蒙史學について、精密に考究された後、第五

篇(約論)に於いてこの概論の結論を行ひつゝ、來るべき第二部、即ちフリードリヒ史學を中心とする特論への道を指示される。

この浩瀚なる大著、極めて特色ある博士の文體を前にしては、淺學菲才の筆者としては、全く目次的紹介しかなし得ない愚を恥するのみである、この點著者並に讀者に對して心から深謝せねばならない。にも拘らず、厚顏にも紹介の頁を汚す所以のものは、全く、著者の高潔な學者的良心とその成果とを、遍く世に公にせんとの微意より出たものである。聞く所によれば、本書第二部の原稿は戰災のため灰燼に歸した由、誠に遺憾にたへない。然し、博士の熱烈なる學問的情熱が、恐らく、日ならずして、不死のミネルヴの如く、灰燼の中より再生せしめられるであらうことを期待するのは、筆者のみではないであらう。(昭和二十年二月、三省堂　定價拾八圓)。(前川貞次郎)

日本群島　小川琢治著

今や日本は未曾有の戰敗の悲慘さの中に喘ぎ敗戰の痛苦をしみ〴〵と味つてゐる。しかしながら、顧るならば我には敗るべくして敗れたのである。そして敗戰の原因にも種々なものが數へられてゐるが一言にして之を云へば、矢張り彼を知らず、己を知らなかつた事に落着くであらう。果して然らば、皇國再建のためには廣く外に通じ、深く內に省みなければならない。われ〳〵地理學專攻の徒にしても新しい眼を以て遍く諸國の、又日本の地理を見直す必要があるのではなからうか。かかる意味に於て私は本書を繙く機會を與へられた事を衷心喜ぶものである。

本書は故小川琢治博士の遺稿集とでも云ふべく、三部から成り立つてゐる。第一部は總論で、序說と地理的位置、近海、領土、海岸、地勢の五章に分たれるが、之は博士が昭和二、三年の頃に發刊を企てられた地理學叢書の第一卷『日本群島』として執筆されたものの草稿で、本來は他に氣候、生物、住民、交通、產業、都邑を加へて完結される筈のものだつた由である。令息茂樹氏の序に依れば、この地理學叢書は當時の世界情勢に對應すべく「世界に於ける帝國の位置について正確な地理的知識を國民に與へ、その上に國家百年の長計を樹立されんことを念願」されたものであつて、日本の地理的長所と共に短所を或は英國と比較對照し、或は歷史に照合して大局から平易に解明されて居り、今更に示唆される所が尠くない。第二部は方志であつて、十一章に區分された地域と結論とからなり、實質的には先の『日本群島』の續編と見られる、昭和四年秋より刊行された新光社の『日本地理風俗大系』への寄稿を主として居り、云はば我が國地誌の通俗化に目的があるといへよう。然し乍ら、文字通り博士の專門中の專門事項についての執筆なる故、本書中で平易なうちにも最も讀みごたへのある部門で、就中、戰爭地理學、刀劍地理學上からの觀察敍述は全く興味深いものがある。惜むらくは寄稿論文の集成といふ性質上、地誌が各地域によつて項目を異にし今一つ綱羅統一されてゐない憾みがあり、又樺太、臺灣、朝鮮の各章に讀み及んではうたた感慨深きものを覺える。第三部は日本群島と題され、之は明治四十三年